

# 太郎坊

幸田露伴

青空文庫



見るさえまばゆかった雲の峰は風に吹き崩されて夕方の空が青みわたると、真夏とはいながらお日様の傾くに連れてさすがに凌ぎよくなる。やがて五日頃の月は葉桜の繁みから薄く光つて見える、その下を蝙蝠が得たり顔にひらひらとかなたこなたへ飛んでい

る。  
主人は甲斐甲斐しくはだし尻端折で庭に下り立つて、蟬も雀も濡れよとばかりに打水をしていゝ。丈夫づくりの薄禿の男ではあるが、その余念のない顔付はおだやかな波を額に湛えて、今は充分世故に長けた身のもはや何事にも軽々しくは動かされぬというようなありさまを見せていゝ。

細君は焜焜を煽いだり、庖丁の音をさせたり、忙がしげに台所をゴトツカせていゝ。主人が跣足になつて働いていゝというのだから細君が奥様然と済してはおられぬはずで、こういう家の主人というものは、俗にいう罰も利生もある人であるによつて、人の妻たるだけの任務は嚴格に果すように馴らされているのらしい。

下女は下女で碓のような尻を振立てて縁側を雑巾がけしている。

まず賤しからず貴からず暮らす家の夏の夕暮れの状態としては、生き生きとして活氣の

ある、よい家庭である。

主人は打水を了<sup>お</sup>えて後満足げに庭の面を見わたしたが、やがて足を洗って下駄<sup>げた</sup>をはくかとおもうとすぐに下女を呼<sup>よ</sup>んで、手拭<sup>てぬぐい</sup>、石鹸<sup>シヤボン</sup>、湯銭等を取り来らしめて湯へいってしまつた。返つて来ればチャンと膳立<sup>ぜんだ</sup>てが出来ているというのが、毎日毎日版に摺<sup>す</sup>つたように定<sup>き</sup>まつている寸法と見える。

やがて主人はまくり手<sup>で</sup>をしながら茹蛸<sup>ゆでだこ</sup>のようになつて帰つて来た。縁に花蔭<sup>はなごぎ</sup>が敷<sup>し</sup>いてある、提煙草盆<sup>さげたばこぼん</sup>が出てゐる。ゆつたりと坐<sup>すわ</sup>つて烟草を二三服ふかしているうちに、黒<sup>く</sup>塗<sup>ぬり</sup>の膳は主人の前に据<sup>す</sup>えられた。水色の天具帖<sup>てんぐじょう</sup>で張られた籠洋燈<sup>かごランブ</sup>は坐敷<sup>ざしき</sup>の中に置かれてゐる。ほどよい位置に吊<sup>つる</sup>された岐阜卓提灯<sup>ぎふちようちん</sup>は涼<sup>すず</sup>しげな光りを放つてゐる。

庭は一隅<sup>ひとすみ</sup>の梧桐<sup>あおぎり</sup>の繁みから次第に暮れて来て、ひよる松檜葉<sup>まつひば</sup>などに滴<sup>したた</sup>る水珠<sup>みずたま</sup>は夕立の後か<sup>みまご</sup>と見紛<sup>みまご</sup>うばかりで、その濡<sup>ぬれ</sup>色<sup>いろ</sup>に夕月の光の薄く映ずるのは何とも云<sup>い</sup>えぬすがすがしさを添<sup>そ</sup>えている。主人は庭を渡<sup>わた</sup>る微風<sup>そよかぜ</sup>に袂<sup>たもと</sup>を吹かせながら、おのれの労働<sup>ほねおり</sup>が為<sup>つく</sup>り出した快い結果を極めて満足しながら味<sup>あじ</sup>わつてゐる。

ところへ細君は小形の出雲焼<sup>いずもやき</sup>の爛徳利<sup>かんどくり</sup>を持つて来た。主人に對<sup>むか</sup>つて坐つて、一つ酌<sup>しゃく</sup>をしながらか微笑<sup>えみ</sup>を浮<sup>うか</sup>べて、

「さぞお疲<sup>くたびれ</sup>勞<sup>らう</sup>でしたらう。」

と云つたその言葉は極めて簡単であつたが、打水の涼しげな庭の景色を見て感謝の意を含まれたような口調<sup>くちぶり</sup>であつた。主人はさもさも甘<sup>うま</sup>そうに一口啜<sup>すす</sup>つて猪口<sup>ちよく</sup>を下に置き、

「何、疲<sup>くたびれ</sup>勞<sup>らう</sup>するというまでのことも無いのさ。かえつて程<sup>ほどよ</sup>好<sup>よ</sup>い運動になつて身体<sup>からだ</sup>の葉<sup>は</sup>になるような氣持<sup>きもち</sup>がする。そして自分が水<sup>みづ</sup>を与<sup>や</sup>つたので庭の草木の勢<sup>いきいき</sup>いが善<sup>よ</sup>くなつて生<sup>いき</sup>々として来る様子を見ると、また明日<sup>あした</sup>も水<sup>みづ</sup>撒<sup>まき</sup>をしてやろうとおもうのさ。」

と云<sup>お</sup>い<sup>わ</sup>つてまた猪口を取り上げ、静<sup>しずか</sup>に飲<sup>ほ</sup>み乾<sup>さら</sup>して更<sup>さら</sup>に酌<sup>しやく</sup>をさせた。「その日に自分が為<sup>や</sup>るだけの務<sup>む</sup>めをしてしまつてから、適<sup>い</sup>宜<sup>い</sup>の勞<sup>ほね</sup>働<sup>おり</sup>をして、湯<sup>は</sup>に浴<sup>は</sup>つて、それから晚酌<sup>いっぱい</sup>に一<sup>いっ</sup>盃<sup>ぱい</sup>飲<sup>や</sup>ると、同<sup>どう</sup>じ酒でも味<sup>あじ</sup>が異<sup>ちが</sup>うようだ。これを思うと勞働<sup>らうどう</sup>ぐらい人を幸福にするものは無いかも知れないナ。ハハハハハ。」

と快<sup>た</sup>げに笑<sup>わら</sup>つた主人の面<sup>おもて</sup>からは実<sup>じつ</sup>に幸福<sup>あふ</sup>が溢<sup>あふ</sup>るよう<sup>よう</sup>に見<sup>み</sup>えた。

膳<sup>ぜん</sup>の上にあるのは有<sup>あり</sup>触<sup>ふ</sup>れた鰻<sup>あじ</sup>の塩<sup>しほ</sup>焼<sup>や</sup>だが、ただ穂<sup>ほ</sup>麥<sup>むぎ</sup>を置<sup>お</sup>き合<sup>あ</sup>はせたのに、ちよつと細<sup>こ</sup>君<sup>きみ</sup>の心<sup>こころ</sup>の味<sup>あじ</sup>が見<sup>み</sup>えていた。主人は箸<sup>はし</sup>を下<sup>くだ</sup>して後、再<sup>また</sup>び猪口を取り上げた。

「アア、酒も好<sup>よ</sup>い、下物<sup>さかな</sup>も好<sup>よ</sup>い、お酌<sup>しやく</sup>はお前<sup>まへ</sup>だし、天下<sup>たいへん</sup>泰<sup>たい</sup>平<sup>へい</sup>という訳<sup>わけ</sup>だな。アハハハハ。だがご馳<sup>ちそう</sup>走<sup>そう</sup>はこれつきりかナ。」

「オホホ、厭いやですネエ、お戯ふざ謔げなすつては。今鳴しぎ焼やきを拵こしらえてあげます。」

と細君は主人が斜ななめならず機嫌きげんのよいので自分も同じく胸むねが闊ひろ々びろとするのでもあろうか、極めて快活きせきに気軽きげんに答えた。多少は主人の気風きふうに同化どうかされているらしく見えた。

そこで細君は、

「ちよつとご免めんなさい。」

と云つて座を立つて退いたが、やがて鳴焼しぎやきを持つて来た。主人は熱いところに一箸いちしやくつけて、

「豪気ごうき豪気。」

と賞しょう翫がした。

「もういいからお前まへもそこで御飯ごぜんを食べるがいい。」

と主人は陶然とうぜんとした容よう子すで細君の労ろうを謝あやして勧めた。

「はい、有り難ありがたう。」

と手短てじだんに答えたが、思わず主人の顔を見て細君はうち微笑ほほえみつつ、

「どうも大層だいじやういいお色いろにおなりなさいましたね、まあ、まるで金太郎きんたろうのようで。」

と真まに可笑おかしそうに云つた。

「そうか。湯ゆが平生いづもに無く熱あつかつたからナ、それで特別とくべつに利きいたかも知れない。ハハハハ

と笑った主人は、真にはや大分とろりとしていた。が、酒さけのみ呑根こんじょう性で、今一盃と云わぬばかりに、猪口の底に少しばかり残っていた酒を一息に吸い乾してすぐとその猪口を細君の前に突き出した。その手はなんとなく危あやうげであった。

細君が静かに酌をしようとしたとき、主人の手はやや顫ふるえて徳利の口へカチンと当ったが、いかなる機はずみ会か、猪口は主人の手をスルリと脱ぬけて縁に落ちた。はつと思うたが及ばない、見れば猪口は一つ跳おどつて下の靴くつぬぎ脱の石の上に打ぶつつかつて、大おおきい片は三ツ四ツ小ちいさ片のは無数に碎くだけてしまった。これは日頃主人が非常に愛あい翫がんしておった堇すみれ花の模様ようの着いた永えい楽らくの猪口で、太郎坊太郎坊と主人が呼んでいたところのものであった。アツとあきれて夫婦はしばし無言のまま顔を見合せた。

今まで喜びに満されていたのに引換ひきかえて、大した出来ごとではないが善いことがあったようにも思われなからかして、主人は快く酔ようていたがせつかくの酔よも興よも醒さめてしまつたように、いかにも残念らしく猪口の欠けを拾つてかれこれと継つぎ合せて見ていた。そして、

「おれが醺よつていたものだから。」

と誰だれに対むかつて云うでも無く、独ひとりごと語ことのように主人は幾度いくども悔くやんだ。

細君はいいほどに主人を慰なぐさめながら立ち上あつて、更に前たちまより立た優まつた美しい猪口いのちを持もつて来て、

「さあ、さつぱりとお心持こころよく此これ盃あがで飲のつて、そしてお結つ局りになすつたがようございませう。」

と慰なぐさめめに勧すすめた。が、主人はそれを顧かみもせずやつぱり毀これた猪口いのちの碎かけら片かをじつと見てみる。

細君は笑いながら、

「あなたにもお似合にあいなさらない、マアどうしたのです。そんなものは仕方がありませんから捨すてておしまいなすつて、サアーツ新規しんきに召よし上あれな。」

という。主人は一向言葉ことばに乗のらず、

「アア、どうも詰つまらないことをしたな。どうだろう、もう継つげないだろうか。」  
となお未練みれんを云いうている。

「そんなに細こまかく毀これてしまったのですから、もう継つげますまい。どうも今更仕方はごございませんから、諦あきらめておしまいなすつたがようございませう。」



という細君の言葉は差当って理の当然なので、主人は落胆がっかりしたという調子で、

「アア諦めるよりほか仕方が無いかナア。アアアア、物の命数には限りがあるものだナア。」

と悵ちやうぜん然として嘆たんじた。

細君はいつにない主人が余りの未練さをやや訝いぶかりながら、

「あなたはまあどうなすつたのです、今日に限って男らしくも無いじやありませんか。いつぞやお鍋なべが伊万里いまりの刺身皿さしみざらの箱を落して、十人前ちゃんそろと揃そろっていたものを、毀こわしたり傷物けがものにしたり一ツも満足の物の無いようにしました時とき、傍そばで見みていらしって、過失そそつだから仕方がないわ、と笑わらって済すましておしまいなすつたではありませんか。あの皿しらべは古ふるびもあれば出来も佳よい品しなで、価値ねうちにすればその猪口ちぐとは十倍も違ちがいましょうに、それすら何なにとも思おもわないでお諦あきらめなすつたあなたが、なんだってそんなに未練みれんらしいことを仰おつしやるのです。まあ一盃ひとつめ召めし上あれな、すつかり御酒ごしゆが醒さめておしまいなすつたようですね。」

と激はげまして慰なぐさめた。それでも主人はなんとなく気が進すすまぬらしかつた。しかし妻つまの深しん切せつを無なにすまいと思おもうてか、重おも々おもしげに猪口ちぐを取とって更さらに飲のみ始はじめた。けれども以前のよう

に浮うき立たたない。

「どうもやはり違った猪口だと酒も甘くない、まあ止めて飯にしようか。」

とやはり大層沈んでいる。細君は余り未練すぎるとややたしなめるような調子で、

「もういい加減にお諦らめなさい。」

ときつぱり言った。

「ウム、諦めることは諦めるよ。だがの、別段未練を残すのなんのというではないが、茶人は茶碗を大切に、飲酒家は猪口を秘蔵にするというのが、こりやあ人情だろうじやないか。」

「だって、今出してまいったのも同じ永楽ですよ。それに毀れた方はざつとした董花の模様で、焼も余りよくありませんが、こちらは中は金欄地で外は青華で、工手間もかかっていれば出来もいいし、まあ永楽という中にもこれ等は極上という手だ、とご自分で仰やった事さえあるじゃあございませんか。」

「ウム、しかしこの猪口は買ったのだ。去年の暮におれが仲通の骨董店で見つけて来たのだが、あの猪口は金銭で買ったものじゃあないのだ。」

「ではどうなされたのでございます。」

「ヤ、こりやあ詰らないことをうっかり饒舌った。ハハハハハ。」

と紛まぎらしかけたが、ふと目を挙あげて妻の方を見れば妻は無言で我が面をじつと護まもっていた。主人もそれを見て無言になってしばしは何か考えたが、やがて快活きさくな調子になって、

「ハハハハハハ。」

と笑い出した。その面上にははや不快の雲は名残なごり無く吹き掃はらわれて、その眼まなこは晴やかに澄すんで見えた。この僅少わずかの間に主人はその心の傾かたむきを一転したと見えた。

「ハハハハ、云うてしまおう、云うてしまおう。一人で物をおもう事はないのだ、話して笑つてしまえばそれで済むのだ。」

と何か一人で合点がてんした主人は、言葉さえおのずと活気を帯びて来た。

「ハハハハハ、お前を前に置いてはちと言い苦にくい話だがナ。実はあの猪口むかしは、昔おれが若かつた時分、アア、今思えば古い、古い、アアもう二十年も前のことだ。おれが思っていた女があつたが、ハハハハ、どうもちツと馬鹿ばからしいようでも真面目まじめでは話せないが。」

と主人は一口飲んで、

「まあいいわ。これもマア、酒に酔つたこの場だけの坐興ざこうで、半分位も虚言うそを交ませて談はなすことだと思つて聞いていてくれ。ハハハハハ。まだ考のさっぱり足りない、年のゆかない時分のことだ。今思えば真実ほんとに夢ゆめのようなことでまるで茫ぼんやり然とした事だが、まあその頃

はおれの頭髮あたまもこんなに禿はげてはいなかつたろうというものだし、また色も少しは白かつたろうというものだ。何といつても年が年だから今よりはまあ優ましだつたろうさ、いや何もそう見つともなく無かつたからという訳ばかりでも無かつたろうが、とにかくある娘に思われたのだ。思えば思うという道理で、性が合あつたとしてもいう事だつたが、先方さきでも深切しんせつにしてくれる、こつちでもやさしくする。いやらしい事なぞはちつとも口にしなかつたが、胸と胸との談話はなしは通つて、どうかして一いっしょ緒じよになりたい位の事は互たがいに思い思つていたのだ。ところがその娘の父に招よばれて遊びに行つた一日あるひの事だつた、この盃さきで酒を出された。まだその時分は陶工やきものしの名なんぞ一ツだつて知つていた訳では無かつたが、ただ何となく気に入つたので切しきりとこの猪口ぶちぐちを面おもしろ白しろがると、その娘の父がおれに對むかつて、こう申しては失礼しつれいですが此盃これがおもしろいとはお若いに似ずお目が高い、これは佳いものではないが了りようぜん全ぜんの作で、ざつとした中にもまんざらの下手へたが造つたものとは異ちがうところもあるように思つていました、と悦よろこんで話した。そうすると傍そばに居た娘が口を添そえて、大層お氣に入つたご様子ですが、お氣に召めしましたのは其盃それの仕合せというものでございます、宜よろしゅうございますからお持歸も下さいまし、失礼しつれいでございますけれど差上げとうございませぬ、ねえお父様、進あ上げたつていいでしょう、と取りなしてくれました。もとより惜むむほどの

貴いものではなし、差当つての愛想にはなる事だし、また可愛がつている娘の言葉を他人の前で挫きたくもなかつたからであらう、父は直に娘の言葉に同意して、自分の膳にあつた小いのをも併せて贈つてくれた。その時老人の言葉に、董のことをば太郎坊次郎坊といひまするから、この同じような董の絵の大小二ツの猪口の、大きい方を太郎坊、小さい方を次郎坊などと呼んでおりましたが、一ツ離して献げるのも異なるものですから二つともに進じましよう、というのでついに二つとも呉れた。その一つが今壊れた太郎坊なのだ。そこでおれは時々自分の家で飲む時には必らず今の太郎坊と、太郎坊よりは小さかつた次郎坊とを二ツならべて、その娘と相酌でもして飲むような心持で内々人知らぬ楽しみをしていた。またたまにはその娘に逢つた時、太郎坊があなたにお眼にかかりたいと申しおりました、などと云つて戯れたり、あの次郎坊が小生に對つて、早く元のご主人様のお嬢様にお逢い申したいのですが、いつになれば朝夕お傍に居られるような運びになりましようかなぞと責め立てて困りまする、と云つて紅い顔をさせたりして、眞実に罪のない楽しい日を送つていた。

と古えの賤の苧環繰り返して、さすがに今更今昔の感に堪えざるもののごとく我れと我が額に手を加えたが、すぐにその手を伸して更に一盃を傾けた。

「そうこうするうち次郎坊の方をふとした過失で毀してしまった。アア、二箇揃っていたものをいかに過失とは云いながら一箇にしてしまったが、ああ情無いことをしたものだ、もしやこれが前表となつて二人が離ればなれになるような悲しい目を見るのではあるまいかと、痛くその時は心を悩ました。しかし年は若し勢いは強い時分だったからすぐにまた思い返して、なんのなんの、心さえ慥なら決してそんなことがあるはずはないと、ひそかに自から慰めていた。」

と云いかけて再び言葉を淀ました。妻は興有りげに一心になつて聞いている。庭には梧桐を動かしてそよそよと渡る風が、ごくごく静穏な合の手を弾いている。

「頭がそろそろ禿げかかつてこんなになつてはおれも敵わない。過般も宴会の席で頓狂な雛妓めが、あなたのお頭顱とかけしてお恰好の紅絹と解きますよ、というから、その心はと聞いたたら、地が透いて赤く見えますと云つて笑い転げたが、そう云われたツて腹も立てないような年になつて、こんなことを云い出しちゃあ可笑いが、難儀をした旅行の談と同じことで、今のことじやあ無いからなにもかも笑つて済むというものだ。で、マア、その娘もおれの所へ来るといふ覚悟、おれも行末はその女と同棲になろうというつもりだった。ところが世の中のお定まりで、思うようにはならぬ骰子の眼という習いだか

ら仕方が無い、どうしてもこうしてもその女と別れなければならぬ、強いて情を張れば  
 その娘のためにもなるまいという仕誼しぎに差懸さしかかった。今考えても冷りひやとするような突き詰  
 めた考えも発おこさないでは無かつたが、待てよ、あわてるところで無い、と思案に思案して  
 生きは生きたが、女とはとうとう別れてしまった。ああ、いつか次郎坊が毀れた時もしや  
 と取越とりこしぐらう苦勞をしたつけが、その通りになつたのは情け無いと、太郎坊を見るにつけては  
 幾度いくたひとなく人には見せぬ涙なみだをこぼした。が、おれは男だ、おれは男だ、一婦人いっふじんのため  
 に心を勞していつまで泣こうかと思ひ返して、女々めめしい心を捨ててしきりに男兒おとこがつて諦  
 めてしまった。しかし歳としが経たつても月が経たつても、どういふものか忘れられない。別れた  
 頃の苦しきは次第次第に忘れたが、ゆかしさはやはり太郎坊や次郎坊の言伝ことづてをして戯れ  
 ていたその時とちつとも変らず心に浮ぶ。氣に入らなかつたことは皆みな忘れても、いいとこ  
 ろは一つ残らず思ひ出す、未練とは悟さとりながらも思ひ出す、どうしても忘れきつてしま  
 うことは出来ない。そうかと云つてその後はどういふ人に縁付よせいて、どこにその娘がどう生く  
 活らしているかということも知らないばかりか、知ろうとおもう意こころも無いのだから、無論そ  
 の女をどうしようというような心は夢ゆめにも持たぬ。無かつた縁まよに迷まよいは惹ひかぬつもり  
 で、今日に満足して平穩へいおんに日を送っている。ただ往時むかしの感情おもひの遺のこした余影かげが太郎坊の湛た

える酒の上に時々浮ぶというばかりだ。で、おれはその後その娘を思っているというのではないが、何年後になつても折節は思い出すことがあるにつけて、その往昔娘を思つていた念の深さを初めて知つて、ああこんなにもまで思い込んでいたものがよくあの時に無分別をもしなかつたことだと悦こんでみたり、また、これほどに思い込んでいたものでも、無い縁は是非が無いで今に至つたが、天の意というものはさて測られないものではあると、なんとなく神さまにでも頼りたいような幽微な感じを起したりするばかりだつた。お前が家へ来てからももうかれこれ十五年になるが、おれが酒さえ飲むといえどもどんな時でも必らずあの猪口で飲むでいたが、談すには及ばないことだからこの仔細は談しもしなかつた。この談は汝さえ知らないのだもの誰が知つていよう、ただ太郎坊ばかりが、太郎坊の伝言をした時分のおれをよく知つているものだつた。ところでこの太郎坊も今宵を限りにこの世に無いものになつてしまった。その娘はもう二十年も昔から、存命えていることやら死んでもうたことやらも知れぬものになつてしまふ、わずかに残つていたこの太郎坊も土に歸つてしまふ。花やかで美しかった、暖かで燃え立つようだつた若い時のすべての物の紀念といえ、ただこの薄禿頭、お恰好の紅絹のようなもの一つとなつてしまふたかとおもえば、ははははは、月日というものの働きの今更ながら強いのに感心する。人の



一代というものは、思えば不思議のものじゃあ無いか。頭が禿げるまで忘れぬほどに思い込んだことも、一ツ二ツと轄くさびが脱ぬけたり輪わが脱とれたりして車が亡なくなって行くように、だんだん消ゆるに近づくとというは、はて恐ろしい月日の力だ。身にも替かえまいとまでに慕したつたり、浮世を憂ういとまでに迷つたり、無い縁は是非もないと悟つたりしたが、まだどこともなく心が惹かされていたその古い友達の太郎坊も今宵は摧くだけて亡なくなれば、恋こいも起らぬ往むかし時に返つた。今の今まで太郎坊を手放さずおつたのも思えば可笑しい、その猪口を落して摧くだいてそれから種いろいろ々と昔むかし時のことを繰返して考え出したのもいよいよ可笑しい。ハハハハ、氷もてあそを弄もべば水を得るのみ、花においの香は虚空そらに留とまらぬと聞いていたが、ほんとにそうだ。ハハハハ。どれどれ飯めしにしようか、長話おわしをした。」

と語り了つて、また高く笑つた。今は全く顔付も冴さえぎえとした平生つねの主人であつた。細君は笑いながら聞き了りて、一種の感に打たれたかのごとく首を傾けた。

「それほどまでに思つていらしたものが、一体まあどうして別わかれなければならぬ機会はめになつたのでしょうか、何かそれには深い仔細があつたのでしょうか。」

とは思わず口頭くちぎに逆はしつた質問で、もちろん細君ひとかたが一方ならず同情を主人の身の上みに寄せたからである。しかし主人はその質問には答えなかつた。

「それを今更話したところで仕方がない。天下は広い、年月は際涯無い。しかし誰一人おれが今ここで談す話を虚言だとも真実だとも云い得る者があるものか、そうしてまたおれが苦しい思いをした事を善いとも悪いとも判断してくれるものが有るものか。ただ一人遺つていた太郎坊は二人の間の秘密をも悉く知っていたが、それも今亡しくなつてしまつた。水を指さしてむかしの氷の形を語つたり、空を望んで花の香の行衛を説いたところで、役にも立たぬ詮議というものだ。昔時を繰返して新しく言葉を費したつて何になろうか、ハハハハ、笑つてしまふに越したことは無い。云わば恋の創痕の痂が時節到来して脱れたのだ。ハハハハ、大分いい工合に酒も廻つた。いい、いい、酒はもうたくさんだ。」と云い終つて主人は庭を見た。一陣の風はさつと起つて籠洋燈の火を瞬きさせた。夜の涼しさは座敷に満ちた。

(明治三十三年七月)

# 青空文庫情報

底本：「ちくま日本文学全集 幸田露伴」筑摩書房

1992（平成4）年3月20日第1刷発行

底本の親本：「現代日本文学全集」筑摩書房

入力：林 幸雄

校正：門田裕志

2002年12月5日作成

2003年7月20日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 太郎坊

幸田露伴

2020年 7月17日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>